

エックハルトは悪をどのように考えたか 悪の原因としての無と創造

山崎達也(創価大学)

エックハルトはラテン語説教第 28 において、悪に関して以下の3点にわたって考察している。すなわち、①悪は積極的な意味での働きではなく、欠如である。②悪の原因を探求することは何も探求しないことを意味する。③無そのものがすべての悪の原因である。

①に関して言えば、神が創造した世界におけるすべてのものは善であり、悪はそもそも存在しない、悪とはいわば存在の欠如だという、教父以来の伝統的解釈をエックハルトが継承していることを意味している。②は、悪はそれ自体としての原因を持っているわけではなく、悪とはむしろ無であることが含意されている。さらに悪は付帯的な本性を有しているが、しかし悪は実体ではなく欠如であることによって、その本性は外に向けて引き寄せ、内的なものから引き離し、他のものへと引き寄せるものとして働く。つまり悪の本性はいわば無性(*nulleitas*)であり、その結果、悪は多性、分割、後退あるいは落下を醸し出す。

ところでトマスは、『神学大全』第1部第49問題第1項主文において、すべての悪は何らかの仕方原因を有するとし、しかしその原因とは付帯的な仕方におけるものであると述べているが、それに対してエックハルトは、③に示されているように、無そのもの(*ipsum nihil*)が悪の原因であると述べている。ここにエックハルトにおける悪の解釈のオリジナリティーがある。こうした悪の原因としての無と神的行為としての創造との緊張関係を描出することによって、命題「存在は神である」(*esse est deus*)でもって表示される、神的存在に関するエックハルト独特の形而上学的一端を明らかにすることが本報告の目的である。

さて、上に述べたように、中世哲学の領域においては、悪の問題は神による万物の創造という問題圏のなかで論じられてきた。そのなかからエックハルトは創造を「無から存在を運び集めること」(*collatio esse ex nihilo*)と解している。その意味についてエックハルトはラテン語説教第23において「神は創造することによって全体を無から呼び出すのであり、すなわち無から存在へと呼び出すのである」と述べている。全体とは存在者全体のことを意味するが、それを存在へと呼び出すのは、エックハルトによれば、じつは存在それ自体なものである。したがって創造とは、存在が無から万物を自己自身へと運び集め、呼び出すことを意味する。つまり、「運び集める」、「呼び出す」という行為が存在の働きと見て、神はそうした存在それ自体である解するところにエックハルトにおける創造理解の特徴がある。

以上のことを踏まえて言えば、無は存在以前にあり、存在の外側にあることになる。存在は善と置換されるという思想によれば、悪は無と同定されることになる。この被造的世界のなかで原罪を負っている人間存在は、必然的に無の影を宿している。人間はそのかぎりにおいて、たえず無へと差し向けられている存在である。ここに悪の原因が見出される。

したがって、無の淵にいる人間を神が存在へと呼び出すことが創造であるが、その場合、神の力は恩寵と呼ばれる。恩寵は存在に関わるものとして理解され、エックハルトは恩寵の目的を「神の恩寵によって私は私がそれであるところの者である」(Iコリ15・10)というパウロの言葉に見ている。つまり、恩寵によってな

される人間の救済が、本来の自己自身を取り戻すこととして理解されている。

以上述べてきたように、悪の問題が創造との連関においてなされる考察は、存在と無という対立関係のかで展開され、その結果、悪のもつ深淵性とその超越的構造が明らかとなる。さらにここから新たな問題が提起されることになる。それはすなわち、悪はわれわれにどのように認識されるのか、そして神は悪をどのような仕方知性認識するのか、といった問題である。本報告では、こうした認識論的問題にも言及したいと考えている。

上にも述べたように、悪は教父たちによってさまざまな仕方議論されてきたが、とりわけ注目されるべき教父はアウグティヌスである。彼の悪に対する見解はトマスによって継承され、スコラ学的思考の枠組みのなかで新たに問われてきた。エックハルトはたしかに、そうした思想の流れのなかを身を沈めて、それらの悪に関する問題を独自の感性を持って受容し、新たな形而上学構築のための重要な構成要素としている。しかしドイツを中心とするエックハルト研究の最近の動向によれば、より重要視されるべきはエックハルトを取り巻く思想史的背景、すなわちドイツ・ドミニコ会に属する哲学者からのエックハルトへの影響である。とりわけ注目されるべきは、エックハルトと同時代人であるフライベルクのディートリヒである。本報告では、ディートリヒとの関連も視野に入れて、哲学史のなかでのエックハルトの位置も浮き彫りにしたいと考えている。